



龍族

नागा लोक

2

南天会
平成26年
11月14日

日本の皆様へ

私はインドの佐々井秀嶺でございます。

今回私の病気のために大変多くの方々にご心配をかけ、申し訳なく思っております。一時は死に至る寸前まで追い込まれましたが、全インドの仏教徒の皆様のご



(10月4日インドラ寺にて 山口眞一氏撮影)

祈念と、また日本の多くの方々のご祈念、またタイ、スリランカの仏教徒のご祈念によって、かつ三世諸仏、菩薩のご慈悲によって、死の寸前からよみがえって復活することができました。

中でも私の大恩人であります備前岡山の長泉寺のご先代住職であります宮本光研大和上様が、普通お体も悪いということをお伺っておりましたのに、未だ生死の事、分明しないうちから旅支度をして、家族の心配を押し切って、老体70有余才の御歳をもって、小林三旅氏を案内として単身インドに渡って来たということをお聞き、私はほとんど覚えてはおりませんが、後でそのことをきいて、感謝動で涙が流れました。

又、今年二月に南天竜宮城に来て下さった折、私の手もとに一銭もなく従業員、又遺跡を守る人達に毎月払う給料さえもなくなり、森田大乘先生様にお願いたしました。それに快くお答え下さり、

危急を救って下された大乘先生様に心より深く御礼申し上げます。今も大切に大切に給料等につかわせていただいております。

南天会の皆様への提案

一、南天会は私の後継者をそちら南天会の中より早急に出するようお願い申し上げます。そして、後継者は一ヶ月に1回はインドに来てこちら印度協会の人と親密に協会運営に就いて懇談するようにして頂きたい。

二、選出された後継者はインド日本の一ヶ月1回の往來の費用は南天会メンバーが持つこと、又は一般より募金すること。

三、南天会は一宗一派にとらわれず、超宗派の立場に於いて広く日本の各方面、各分野各宗派に呼びかけ、又記事にして又は広告して広くその手段を選ばず募金を呼び掛けること。

四、それに於いてこちら南天竜宮城におけるわたしに引きつづ

く仏事業は進展可能となり印度協会のすべてに亘って支援することが可能となつてくる。

五、いかなる親密なインド人でも彼らの銀行口座に南天会はふりこまないこと。

何故私が今ここでこんなことを云うかと云うと、今後又どんな形で、どんな手段で私の命が絶たれるかも知れない可能性があり、それを今より予想して上記のことを急速的に現実的に進めなければならぬことを思うからであります。早急に南天会よりの支援活動をお願いいたします。

私自身、現在までどうにかやってきました。龍樹菩薩の力に驚き感謝いたして居ります。私はよくこの約五十年間ガンバリました。南天竜宮城の復興と併せて全インド的仏教復興運動の最先頭に立ち、又インド仏教徒の大悲願でありますブッダガヤ大菩提寺奪還運動の先頭に立ち、又全インド各州各地の寺々の地鎮祭、落慶法要等のプログラムに体力のつづく限り出席し、更には結婚式、い

いなづけ式等においては導師を
つとめました。

又は南天竜宮城の九年間にわた
る大発掘、竜樹菩薩大寺の建設、
竜樹大菩薩に関する法城土地の
購入をしてきました。

私を南天竜宮城にご召還下さ
れし竜樹菩薩様、私を常に守護し
て下さる観世音菩薩様等、三世諸
仏諸菩薩様方、又インドの救世主
アムベドカル菩薩様方の力によ
り、私はふたたびこの世に復活し
てきたのです。又激しい真剣勝負
となるでしょう。本格的な私の体
に快復しつつある今、私はそれを
覚悟しています。

以上数項目に於いて南天会に
私よりのお願いととしてご提案を
提出させていただきます。どうか
会議上においてよろしく御検討
下さるようお願いいたします。日
本の方は、こちらの激しい激しい
現状現実が理解出来ず、日本流に
ゆっくりゆっくり歩調を進めて
いるようですが、印度では身を削
って毎日毎日が生死の真剣勝負
です。至急を要します。印度の私
達の協会を御救い下さい。救いの
手を上記に併せて至急手を打っ
て下さい。沙門秀嶺伏してお願い

申し上げます。

2014年9月9日

沙門 秀嶺 九拜

※危篤を脱し、ナグプールへ帰ら
れた佐々井師から南天会に向
けてメッセージをいただきましたま
本人に確認の上で、本稿に掲載
いたしました。

インドの事情や、佐々井師の体
調などを考えますと、私達南天
会に取りましても何らかの動
きを考えてゆかなければなら
ないと思います。

会員各位には、この佐々井師か
らの提案をお読みいただき、南
天会を通じてご意見ご提案を
いただければと思います。

12月6日の第2回交流会に
はその辺のことも話し合えれ
ばと考えております。それまで
に事務局へお電話、メール等お
寄せください。

第2回 南天会 交流会

講演

「現代インドを生きる仏教僧佐々井秀嶺と仏教徒たちの取り組み」
講師

筑波大学 人文社会科学系助教 根本達 (ねもとたつし) 博士

日時.. 12月6日 (土)

午後2時〜

場所.. 真成院回向堂

東京都新宿区若葉2-7-8
電話03(3351)7281

佐々井上人とインド仏教徒
の歩みを中心テーマに研究
されている筑波大学の根本
達助教の講演を開催します。
講演後、交流会。南天会会
計報告、佐々井上人からの
提案について話し合います。
会員以外の参加も歓迎です。
是非ご参加ください。

(無料)

※12月6日は、インド初代
法務大臣アンベードカル博
士の命日にあたります。



【寄稿】 インド・ナグプールへ旅して

山口眞一

十七年前に読んだ一冊の本、山際素男『不可触民の道』（三二書房、現在は光文社新書から再版）に、私はいい知れぬ衝撃を受けた。

それまでカースト制度については、せいぜい学校で習った程度の知識しかなかった。学生時代には部落問題研究会に属し、平等とか人権という問題を勉強していたくせに、インドのカースト差別にほとんど関心を寄せていなかったことを恥ずかしく思うとともに、アンベードカル博士や佐々井秀嶺師の奮闘ぶりに興奮をおぼえた。「そうか、インドでは仏教は滅びたも同然と置いていたが、仏教の平等の精神が不可触民の人々を励ましているのか！」と、嬉しくもあった。

その後、アンベードカル『ブツダとそのダンマ』、ダナンジャイ・キール『アンベードカルの生涯』、山崎元一『インド社会と新仏教』、山際素男『破天・インド

仏教徒の頂点に立つ日本人』、佐々井秀嶺『必生・闘う仏教』、小林三旅『男一代菩薩道』などを読むにつけ、いよいよインドにおける仏教復興運動に関心は深まっていった。そうして、およそ二年前、「ナグプールで集団改宗式を見たい！」と思いついた。

インドには以前に一度、仏跡参拝に一度行ったことがある。バックパックを背負って歩き、下痢もせずにすんだ。だからインドを一人で旅することに不安はなかった。ただ実際に旅程を決める際に迷ったのは、「集団改宗式は何日に開催されるのだろうか」の情報が見当たらないこと。富士玄峰師にメールでお尋ねすると、「今年の改宗記念日は十月三日とのことです」と教えていただき、これによって旅程を組んだものの、これとは違う情報（十月の満月の日、あるいは十月十三日）もあり、本当に三日で正しいかどうかの確信はなかった。おまけにインターネットの情報によると、佐々井師は大病を患ってムンバイの病院に入院、危篤が伝えられたという。回復されたとはいうものの、集団

改宗式を仕切ることができなか心配でもあった。

実際にナグプール入りしたのは10月2日朝。まずは佐々井師のお寺へ。小林三旅さんから、佐々井師のお寺の名前が“Indora Buddha Vihar”であると教えて

もらっていた。リクシャの運転手は場所をよく知らない様子だったがあちこち尋ね回りようやく到着。リクシャを降りたとたん、一人の男性から「ジャイ・ビーム」の挨拶が。インド仏教徒の

間での挨拶は「ナマステ」ではなく、アンベードカルの名前に由来する「ジャイ・ビーム」だとは、本で読んでいた。私も合掌して「ジャイ・ビーム」と返して、少し嬉しくなった。

本堂に一歩足を踏み入れびっくりしたこと。それは老若男女、出家在家問わず本堂を埋め尽くし談笑したり敷物をしいて寝転がったりしていたこと。日本のお寺では（どの国のお寺でも）ちょっと見られない光景だ。集団改宗式に参加する人たちが宿泊所として利用しているのだろうか。実は私が心配していたのは、数十万人が参加するという集団改宗式とあってみれば、ナグプールのホテルは予約で一杯になってしまっているのではないか、ということだった。実際にはそのようなことはなく、私が利用したホテル（エコノミーなビジネスホテル）も、ガラガラだった。ほとんどの参加者はお寺に泊まるか野宿なのだろう。

このお寺で、集団改宗式のスケジュールがどうなっているか、ま



た佐々井師が今どちらにおられるのか、聞いてみようと思っても、英語が通じる人がほとんどいない（私の英語も怪しいものだが）。以前インドを旅した時も感じたが、インドで英語が通じるのは限られた階層の人に限られる。英語でのコミュニケーションはあきらめざるを得なかったが、一眼レフカメラを構えた外国人とみて、若い子たちが「写真を撮ってくれ」としきりによつてくる。仲間が仲間をよび、次々にくるので何十枚もシャッターを切り、モニターを見せてあげるだけで喜んで撮った。ただ困ったのは、そうして撮った写真をどこへ送ればよいか、address という英単語も通じない。おそらくは、自分の写真を送って欲しいというよりも、外国人といっしょに写真を撮るといふこと自体が楽しいのだと解釈することにする。

そこから一旦ホテルにもどり、夕方、改宗広場（デークシャ・ブーミ）に出かけてみた。ものすごい人の波だ。道路両側には出店がたちならび、まさにお祭り騒ぎである。いや、お祭りそのものとい

つてよい。広場や道路のあちこちで、集会やらパレードやら演説やらお説教やらが行われている様子だが、残念ながら言葉が分からない。ライトアップされた仏塔のフォルムが美しい。

ここで出店していた人から英語で話しかけられたのを幸いに、「改宗式はいつあるのか」と尋ねると、「明日十時から」という。そうか、今日は前夜祭なんだ、と納得し、やはり三日で間違いなかったと安心した。この方(Supadma さん)としばし話し、この地の仏教について教えてもらおう。デークシャ・ブーミはナグプールだけでなく、自分の町にも小規模なのがあり、そこにも仏塔が建っているそうだ。「明日はもつと大勢くるはずだよ」。明日の再会を約して別れた。（なお、この別の町にもあるというデークシャ・ブーミには翌々日立ち寄ることになった。）

こうして翌日朝ホテルを出て改宗広場に向くと、やはり昨日以上の人の波で前に進むことも困難、入り口から中央ステージにた

どり着くとすでに10時を過ぎているが、ステージ周りもステージ場も閑散としている。終わってしまった？その辺りのスタッフらしき人に聞くと「夕方四時からだ」。10月とはいえ、気温は三十五度を超えている。この暑さでここにとどまる気力がない軟弱な私。とりあえずホテルへ戻り、再度出直す。今度はかなりの人数がステージ周りに集まっているが、実際に始まったのは六時からだった。中央ステージ前には来賓席か招待席とおぼしきスペースがあり、その後方に柵があつて、私は柵の真後ろに立ってカメラを構えていると、警備の人が柵の内側に入るように合図してくれた（カメラマンと勘違いしたのか？）

私はじつは大きな勘違いをしていた。それは翌日に気付いたことだが、このステージで行われているのは、集団改宗式ではなかった。改宗記念大会というか式典ともいふべきものだったのだ。ここでの内容は、歌とか演説、シユプレヒコール、要人のあいさつなどで、何をいつしているかはさっぱり

分からず、英語通訳もあまりよく聞き取れない。パリー語での三帰五戒くらいはかるうじて分かった。実は集団改宗式というのは、いくつかのもつと小さなグループ毎に数日間かけて五月雨式に執り行われるのだという。だから「明日十時から」というのも間違いではなかったのだし、お寺で「何日の何時からか」と質問して、困った顔をされたのも当然と言えば当然なのだ。もつと正確に情報収集しておけばよかったが、ともかくも改宗記念日のメインイ



ベントに立ち会えたことはよかった。インド旅行の目的は達成できた。

ただ、ここまでで佐々井師にじかにお目にかかることはまだできていない。翌四日、とりあえず

前述の Indora Buddha Vihar

へ。ここで運良く佐々井師にお目にかかることができた。具合についてお尋ねすると「州政府がムンバイの一番いい病院に連れてつたんだ。死にかけたよ」と。話の力は、とても危篤だったとは思えないお元気さではあったが、昨日の式典での様子からすると、やはり体の衰えはいかんともしがたように思われた。私が浄土真宗の僧侶であることを申し上げると、無量寿経の四十八願のことにふれて「やっぱりこれも差別があつてはいかんといい教えだね」と言われる。この視点は私の恩師・尾畑文正先生からも常々教えられていたところだが、浄土真宗外の方から指摘されたのは初めてのことで、行もさることながら教壇においても深い眼差しをもって経典を読み解いておられることに、あらためて驚かされる。次に予定が入っているとのことで、

ほんの15分ばかりお話しできただけだが、こうしている間にもスタッフが入れ替わり立ち替わりやつて来て報告をあげ、それにながしかの指示を与えている様子。

午後、マンセルの仏教遺跡にいらっしやるので「よかつたら一緒に行きませんか？」と誘っていたのだが、実は私のほうでも既に行く予定で、ホテルを通じて車をチャーターしてしまっていたので、ここでとりあえず辞した。さて、いざマンセル遺跡へ。ただ運転手がマンセルは知っていても「遺跡」が分からない。なんだか別のヒンズー寺院へ連れて行かれてしまった。「ここじやなくて仏教の施設」と注意してももともと遺跡があることを知らないようで、道行く人に教えてもらってたどり着くことができた。私も正確な場所を把握しておくべきだった。思ったよりはこじんまりとした感じだったが、小高い丘を昇り、風に吹かれながら下を見下ろすとすばらしい景観だ。これでナグプールに来た目的はぜんぶ果すことができたので、その

日の夜行列車で町をあとにした。



ナグプールでいちばん印象的だったのは仏旗である。改宗記念日だから特別だったのかもしれないが、街のいたるところに掲揚され、お店やリクシャーにも小さな旗を掲げているものがある。六色仏旗の鮮やかさは遠目にもよく分かるし、仏教徒としての連帯感を醸し出すものだ。私が住職をつとめるお寺でも行事や法要の際には必ず掲揚しているが、「あれは何ですか？」とよく聞かれる。

日本でも全日本仏教会などが販売しているものの、あまり馴染みがない。日本のお寺では掲揚されていたとしても、多くは国際仏旗ではなく、いわゆる「旧仏旗」を使っている(デザインは同じだが色が違う)。以前ネパールに行った時にも、仏教徒の家には仏旗が飾られていた。日本でももっと普及して欲しいものだ。実はインドに出立する直前に、全日本仏教会が販売しているプラスチック製の仏旗バッヂを十個くらい仕入れ、一つは自分のカメラのストラップに取り付け、他は知り合った人へのお土産にした。こうして自分が仏教徒であることをアピールできたのはよかった。たとえば私が泊まったホテルのスタッフも私に「仏教徒なんですか？ ジャイ・ビーム！」と嬉しそうな顔をした。ささやかな交流も大切なことと思う。(了)

※山口様は名古屋市天白区にある真宗大谷派教心寺のご住職です。ご寄稿ありがとうございます。

南天会会計報告(2014.5.30~10.30)

月	日	摘要	収入金額	支出金額	差引残高
5	30	会費(振込)	10000		10000
7	29	会費(振込)	220000		230000
7	29	会費(現金)	82000		312000
8	30	会費(振込)	165000		477000
9	9	インドへ小包発送		2100	474900
9	15	会費(現金)	30000		504900
9	15	交流会カンパ	9600		514500
9	16	インドへ送金(佐々井師個人口座)		50000	464500
9	16	国際送金手数料		2500	462000
9	24	インドへ送金(竜樹菩薩協会口座)		50000	412000
9	24	国際送金手数料		2500	409500
9	30	会費(振込)	60000		469500
10	1	南天会郵貯口座利子	13		469513
10	15	インドへ送金(協会口座)		400000	69513
10	15	国際送金手数料		2500	67013
10	29	会費(振込)	65000		132013

(単位 円)

会費納入額 632000円 会員数 60名

※上記の他、諸経費を寄附いただいております。

長谷川晃一様 7月 8日 ホームページ作成費用 15000円
 関口雄太様 7月14日 南天会案内郵送料 17296円
 事務局(佐伯) 会報他郵送料など 11996円

※また、真成院様に世話人会、交流会の会場(7/14、9/15)を提供いただいております。

その他多くの皆様のご協力をいただいております。

(インドへの送金について)

インドの佐々井師個人口座、および竜樹菩薩協会口座に都合3回合計50万円を送金いたしました。最初に口座確認のため、少額(5万円)づつを各口座に送金し、無事入金を確認できましたので、残り40万円を佐々井師が指定した竜樹菩薩協会口座に送金しました。

1回の送金で、国際送金手数料として2500円掛かります。また送金額の中から、現地インドでの手数料が約10ドル引かれます。

インドでの支援金使途については、主にナグプールの諸施設(インドラ寺、マンセル文殊師利菩薩大寺、竜樹菩薩大寺、老人ホーム)などの管理費および人件費に使用されます。詳細については竜樹菩薩協会(佐々井師が会長)の会計報告を待って、皆様にご報告いたします。

(南天会の会計年度について)

南天会発足を本年7月14日とし、毎年3月末を以て会計年度とします。1月~3月の新規入会者の会費は、次年度会費とし、それ以外の会員には4月以降年会費納入案内を送付いたします。

(アンベードカル博士と
仏教改宗運動)
B・R・アンベードカル



(1891～1956)

インドの政治家・不可触民解放の指導者。自ら不可触民に生まれ、カースト制による苛酷な差別を受けながらも、研鑽をつみ、政治、法律、思想、哲学など各分野でインドを代表する人物となる。この間常に不可触民の解放に尽力し、インド初代法務大臣に就任して現インド憲法を起草、不可触民制の撤廃を宣言した。最晩年の1956年、ナグプールにおいて約50万人の不可触民と共に仏教に改宗する。インド仏教復興運動の父。その著『ブッダとそのダンマ』はインド仏教徒のバイブル。
インド仏教は7世紀ごろ成立した密教の興隆の後、徐々に衰退していき、1203年、ベンガル

地方のビクラマシーラ寺がイスラム教徒によって破壊されたことを以て、事実上滅亡したと言われる。インドに残った仏教徒はイスラム教かヒンドゥー教に改宗を余儀なくされ、その時にカーストの最下層に組み込まれたという説もある。

またヒンドゥー教においては、ブッダはビシュヌ神の化身とされ、仏教をヴェーダ聖典を守るための偽の教説として、これを奉ずる人々の地位は低く置かれた。

カーストの奴隷階級であるシユードラおよびアウトカーストの不可触民に対する差別、抑圧は現代まで続いており、1950年のインド憲法制定(カースト制撤廃)以後も根深く残っている。

1956年10月14日、ナグプールにおいてアンベードカルと50万不可触民の仏教改宗が行われ、再び仏教はインド国内で復興の烽火を挙げた。その構成要員はヒンドゥー教に抑圧されてきた人々が中心となっている。

改宗にあたっては、三帰依文五戒(不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒)が授けられ、改宗の二十二の誓いを宣誓する。

(仏教改宗二十二の誓い)

1、私はブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュワラの信仰を持たず、それらを崇めるつもりもない。
2、私は神の化身と信じられているラーマやクリシュナの信仰を持たず、それらを崇めるつもりもない。

3、私はガウリー、ガナパティその他ヒンドゥーの神々や女神の信仰を持たず、それらを崇めるつもりもない。私は神の化身を信じない。
5、私は主ブッダがヴィシュヌの化身だと信じるつもりはない。私はこれを狂った偽プロパガンダと信じる。

6、私はシュラッター(信仰)を行わない。ピンダ(供え物の団子)を捧げることもしない。
7、私はブッダの法則と教えにもとる行いをするつもりはない。

8、私はバラモンが執り行うどんな式典も受け入れるつもりはない。
9、私は人の平等さを信じるつもりである。

10、私は平等を確立するために励むつもりである。

11、私はブッダの八正道に従うつもりである。

12、私はブッダが定めた十波羅蜜

に従うつもりである。

13、私は全ての生き物に思いやりと親愛の情を抱き、かれらを保護するつもりである。

14、私は泥棒するつもりはない。

15、私は嘘をつくつもりはない。

16、私は姦淫の罪を犯すつもりはない。

17、私は酒やドラッグのような酩酊させるものを摂取するつもりはない。

18、私はいつの日も八正道に従い、思いやりと親愛の情を実践するために励むつもりである。

19、私はヒンドゥー教を捨てる。それは人類にとって有害であり、不平等を基礎とするが故に人類の進歩と前進を妨げる。そして私は仏教を自己の宗教として採択する。

20、私は断固として、ブッダのダンマこそが唯一真実の宗教であると信じる。

21、私は、私が再生すると信じる。

22、私は今後、我が人生をブッダとダンマの原理と教えに依って導いていくことを厳粛かつ堅固に宣言する。



大菩薩峠 (ナンナガート)

佐々井秀嶺上人を訪ねて
 ドンガルカル仏教徒大会参列
 インド・ナグプールと大菩薩峠
 アンベードカル菩薩の故地を巡る旅
 2015年
 2月4日(水)～2月12日(木)
 旅行代金 288,000円

南天会主催でインド旅行を企画しました。2月6日のチャティスガル州ドンガルカル市で開催される世界仏教徒大会に参加し、佐々井上人に丸4日間同行して、シルプール遺跡、マンセル、竜樹菩薩大寺、ナグプール各所を訪ねます。後半は、佐々井上人心の絶景、インドの大菩薩峠(ナンナガート)を探访し、文教都市プネー、インド最大の都市ムンバイを訪れて、アンベードカル菩薩縁りの地を巡ります。詳細は同封のパンフレットを参照ください。(南天会事務局の佐伯が行いたします。)

南天会現況 (10月31日現在)

正式会員数 60名
 会費・支援金総額 632,000円

賛同人 (50音順)

岩佐澄隆 (仏国土をつくろう会会長)
 漆間宣隆 (浄土宗浄土院住職・前岡山
 県佛教会会長)

織田隆深 (高野山真言宗真成院住職・
 密門会会長)

黒澤雄太 (剣士・日本武徳院師範)

小池一郎 (株式会社マクシス・シンター
 常務取締役)

島影 透 (株式会社サンガ社長)

高山龍智 (佐々井上人お弟子)
 富士玄峰 (臨済宗・元ナグプール同友
 会世話人)

宮淵泰存 (日蓮宗妙光寺住職)

宮本光研 (真言宗御室派元執行)
 山本宗補 (フォトジャーナリスト)

※当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、お名前を公表させていただきます。賛同いただける方は是非お申し出ください。 ※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。

南天会告知のお願い

事務局不如意のため、入会者数が未だ少ない状況です。是非周知の程よろしくお願いいたします。パンフレット等必要な方は、事務局までお知らせください。(南天会ホームページの「南天会について」の一番下からパンフレットPDFがダウンロードできます) その他、ご提案等ございましたら是非ご連絡下さい。

会報『龍族』寄稿のお願い

当会々報は、年4回をめざして発行して参りたいと思えます。会員それぞれの佐々井上人に対する思い、研究、インド訪問記など、是非ご寄稿下さい。原稿はメール、郵送等にてお送りください。皆様の声を取り入れた誌面にしていきたいと思えます。(原稿料等はお支払いいたしません)

佐々井秀嶺資料室

昨年3月より佐々井上人の所蔵する資料のアーカイブ化をめざし活動して参りました「佐々井秀嶺資料室準備委員会」は、南天会と事務局が同一であり、またより幅広い資料収集体制を確立す

るために、南天会と統合して内部団体とし、名称も「佐々井秀嶺資料室」となりました。尚、南天会と資料室は別会計とし、資料室へのご支援は別に受け付けております。

龍尾言

8月の危篤騒動もあり、今回佐々井師から頂いたメッツセージから相当な危機感を読み取ります。我々の出来ることを迅速に進めていかなければなりません。会員、関係者皆様のお力添え何卒よろしくお願いいたします。

(南天会事務局)
 〒710-0004
 岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内
 TEL/FAX 086-463-9391
 佐伯隆快 (090-5304-8955)
 小林三旅 (090-4538-2677)
 南天会ホームページ www.nantenkai.org
 メール nantenkai@gmail.com
 佐々井秀嶺資料室フェイスブックページ
 ご利用ください

